



# Czech Philharmonic

Semyon Bychkov, Music Director / Chief Conductor

Japan Tour 2023



チェコ・フィルハーモニー管弦楽団

音楽監督・首席指揮者：セミヨン・ビシュコフ

2023年 日本公演



# Czech Philharmonic

Semyon Bychkov, Music Director / Chief Conductor

Japan Tour 2023



チェコ・フィルハーモニー管弦楽団

音楽監督・首席指揮者：セミヨン・ビシュコフ

2023年 日本公演

10.29 (日)14:00 東京 サントリーホール

October 29 Sun. 14:00 Tokyo Suntory Hall

主催：ジャパン・アーツ／日本経済新聞社 特別協賛：三井住友海上プライマリー生命保険株式会社

ドヴォルザーク：序曲「オセロ」Op.93

A. Dvořák: Othello Overture, Op.93

ドヴォルザーク：チェロ協奏曲 短調 Op.104 (チェロ：パブロ・フェランデス)

A. Dvořák: Cello Concerto in B minor, Op.104 (Cello: Pablo Ferrández)

- 第1楽章：アレグロ 1st Mov.: Allegro
第2楽章：アダージョ・マ・ノン・トロッポ 2nd Mov.: Adagio ma non troppo
第3楽章：アレグロ・モデラート 3rd Mov.: Allegro moderato

ドヴォルザーク：交響曲第8番 ト長調 Op.88

A. Dvořák: Symphony No.8 in G major, Op.88

- 第1楽章：アレグロ・コン・ブリオ 1st Mov.: Allegro con brio
第2楽章：アダージョ 2nd Mov.: Adagio
第3楽章：アレグレット・グラツィオーソ 3rd Mov.: Allegretto grazioso
第4楽章：アレグロ・マ・ノン・トロッポ 4th Mov.: Allegro ma non troppo

10.31 (火)19:00 東京 サントリーホール

October 31 Tue. 19:00 Tokyo Suntory Hall

主催：ジャパン・アーツ／日本経済新聞社 特別協賛：三井住友海上プライマリー生命保険株式会社

ドヴォルザーク：序曲「謝肉祭」Op.92

A. Dvořák: Carnival Overture, Op.92

ドヴォルザーク：ピアノ協奏曲 ト短調 Op.33 (ピアノ：藤田真央)

A. Dvořák: Piano Concerto in G minor, Op.33 (Piano: Mao Fujita)

- 第1楽章：アレグロ・アジタート 1st Mov.: Allegro agitato
第2楽章：アンダンテ・ソステヌート 2nd Mov.: Andante sostenuto
第3楽章：フィナーレ、アレグロ・コン・フォーコ 3rd Mov.: Finale. Allegro con fuoco

ドヴォルザーク：交響曲第7番 ニ短調 Op.70

A. Dvořák: Symphony No.7 in D minor, Op.70

- 第1楽章：アレグロ・マエストロ 1st Mov.: Allegro maestoso
第2楽章：ポーコ・アダージョ 2nd Mov.: Poco Adagio
第3楽章：スケルツォ、ヴィヴァーチェ 3rd Mov.: Scherzo. Vivace
第4楽章：フィナーレ、アレグロ 4th Mov.: Finale. Allegro

11.1 (水)19:00 東京 サントリーホール

November 1 Wed. 19:00 Tokyo Suntory Hall

主催：ジャパン・アーツ／日本経済新聞社 特別協賛：三井住友海上プライマリー生命保険株式会社

ドヴォルザーク：序曲「自然の中で」Op.91

A. Dvořák: In Nature's Realm Overture, Op.91

ドヴォルザーク：ヴァイオリン協奏曲 イ短調 Op.53 (ヴァイオリン：ギル・シャハム)

A. Dvořák: Violin Concerto in A minor, Op.53 (Violin: Gil Shaham)

- 第1楽章：アレグロ・マ・ノン・トロッポ 1st Mov.: Allegro ma non troppo
第2楽章：アダージョ・マ・ノン・トロッポ 2nd Mov.: Adagio ma non troppo
第3楽章：フィナーレ、アレグロ・ジョコーソ・マ・ノン・トロッポ 3rd Mov.: Finale. Allegro giocoso ma non troppo

ドヴォルザーク：交響曲第9番 ホ短調 Op.95 「新世界より」

A. Dvořák: Symphony No.9 in E minor, Op.95 "From the New World"

- 第1楽章：アダージョーアレグロ・モルト 1st Mov.: Adagio — Allegro molto
第2楽章：ラルゴ 2nd Mov.: Largo
第3楽章：スケルツォ、モルト・ヴィヴァーチェ 3rd Mov.: Scherzo. Molto vivace
第4楽章：アレグロ・コン・フォーコ 4th Mov.: Allegro con fuoco

11.4 (土)14:00 横浜 横浜みなとみらいホール

November 4 Sat. 14:00 Yokohama Yokohama Minato Mirai Hall

主催：ジャパン・アーツ 共催：横浜みなとみらいホール(公益財団法人 横浜市芸術文化振興財団)

ドヴォルザーク：交響曲第8番 ト長調 Op.88

A. Dvořák: Symphony No.8 in G major, Op.88

- 第1楽章：アレグロ・コン・ブリオ 1st Mov.: Allegro con brio
第2楽章：アダージョ 2nd Mov.: Adagio
第3楽章：アレグレット・グラツィオーソ 3rd Mov.: Allegretto grazioso
第4楽章：アレグロ・マ・ノン・トロッポ 4th Mov.: Allegro ma non troppo

ドヴォルザーク：交響曲第9番 ホ短調 Op.95 「新世界より」

A. Dvořák: Symphony No.9 in E minor, Op.95 "From the New World"

- 第1楽章：アダージョーアレグロ・モルト 1st Mov.: Adagio — Allegro molto
第2楽章：ラルゴ 2nd Mov.: Largo
第3楽章：スケルツォ、モルト・ヴィヴァーチェ 3rd Mov.: Scherzo. Molto vivace
第4楽章：アレグロ・コン・フォーコ 4th Mov.: Allegro con fuoco

10月28日(土)名古屋 愛知県芸術劇場コンサートホール 主催：中京テレビ ★
10月29日(日)東京 サントリーホール 主催：ジャパン・アーツ／日本経済新聞社 ★
10月30日(月)新潟 リーとびあ 新潟市民芸術文化会館 コンサートホール 主催：(公財)新潟市芸術文化振興財団、BSN新潟放送 ◎
10月31日(火)東京 サントリーホール 主催：ジャパン・アーツ／日本経済新聞社 ◎
11月1日(水)東京 サントリーホール 主催：ジャパン・アーツ／日本経済新聞社 ■
11月3日(金・祝)大阪 ザ・シンフォニーホール 主催：ザ・シンフォニーホール ★
11月4日(土)横浜 横浜みなとみらいホール 主催：ジャパン・アーツ 共催：横浜みなとみらいホール[(公財)横浜市芸術文化振興財団]
★パブロ・フェランデス ◎藤田真央 ■ギル・シャハム

後援：チェコ共和国大使館



チェコ共和国大使館



CZECH-JAPAN STRATEGIC PARTNERSHIP



文化庁 劇場・音楽堂等の 子供鑑賞体験支援事業 (10/29、11/1、11/4のみ)

## セミヨン・ビシュコフ (音楽監督・首席指揮者)

Semyon Bychkov, Music Director / Chief Conductor



1952年レニングラード(現・ Санктペテルブルグ)生まれ。1975年アメリカに移住し、1980年代半ばよりヨーロッパをベースに活躍している。

2013年のチェコ・フィルとの公演に続いて、彼は同楽団と「チャイコフスキー・プロジェクト」を開始。コンサート・シリーズやスタジオ録音などを通して、チャイコフスキーの音楽を追求する喜びを共有している。同プロジェクトでは、2016年秋にデッカ・レーベルから交響曲第6番「悲愴」(カップリングは幻想序曲「ロメオとジュリエット」)、1年後には「マンフレッド交響曲」をリリース。そして2019年秋には、チャイコフスキーの交響曲全曲、3つのピアノ協奏曲、弦楽セレナード、「フランチェスカ・ダ・リミニ」などが収録されたボックスセットの発売と、それに続く同楽団のプラハ、東京、パリ、ウィーンでの公演で最高潮を迎えた。

ソヴィエト連邦を離れてから14年後の1989年、彼は母国に戻り、 Санктペテルブルグ・フィルハーモニー交響楽団の首席客演指揮者に就任。そして同年、パリ管弦楽団の音楽監督に就任した。また、その数年前からニューヨーク・フィル、ベルリン・フィル、ロイヤル・コンセルトヘボウ管などの楽団で活躍し、国際的なキャリアが活発になった。1997年にはケルン放送交響楽団の首席指揮者、1998年にはドレスデン国立歌劇場の首席指揮者に就任。2018年10月、チェコ・フィルハーモニー管弦楽団の首席指揮者・音楽監督としての任期をスタートさせた。また、今年9月には、2028年までの契約延長が発表された。

ビシュコフは、欧米の主要オーケストラや歌劇場で指揮をしている。チェコ・フィルのタイトル他、BBC交響楽団の名誉称号も与えられ、BBCプロムスには毎年登場している。さらに王立音楽院では、チェコ・フィルと共に、2020年より教育プログラムのシリーズを立ち上げた。また2015年のインターナショナル・オペラ・アワードでは、「コンダクター・オブ・ザ・イヤー」に選出された。

録音でのキャリアは1986年にフィリップスとの契約で始まり、ベルリン・フィル、バイエルン放送響、ロイヤル・コンセルトヘボウ管、フィルハーモニア管、ロンドン・フィル、パリ管などと膨大かつ記念碑的なディスコグラフィを作り上げてきた。ケルン放送響との13年のコラボレーション(1997-2010)では、ブラームスの交響曲全集やR.シュトラウス、マーラー、ショスタコーヴィチ、ラフマニノフ、ヴェルディなどの作品を収録。ワーグナー「ローエングリン」の録音は、BBCミュージック・マガジンのレコード・オブ・ザ・イヤー2010に選出され、ウィーン・フィルとのシュミットの交響曲第2番の録音は、同誌の「レコード・オブ・ザ・マンズ」に選出された。

Semyon Bychkov, Music Director / Chief Conductor



## チェコ・フィルハーモニー管弦楽団

Czech Philharmonic



創設127年のチェコ・フィルハーモニー管弦楽団は、1896年1月4日に有名なルドルフィナムでの創立公演でオール・ドヴォルザーク・プログラムを演奏したが、指揮をしたのは作曲家自身であった。チェコ・フィルは、祖国の作曲家の音楽の解釈において絶対的な信頼を得ていると同時に、ブラームス、チャイコフスキー、そして1908年に自作の交響曲第7番を同楽団で自ら指揮したマーラーの音楽との深い関係性が知られている。

チェコ・フィルの誇り高き歴史は、ヨーロッパの中心に本拠地を構える地域性と、チェコ共和国の不安定な政治の歴史を反映しており、スメタナの「わが祖国」が、強力なシンボルとなっている。1945年、首席指揮者のラファエル・クーベリックが、チェコスロヴァキアの解放に感謝を捧げる公演で同曲を指揮し、その45年後にはまた、チェコスロヴァキアの最初の自由選挙を記念する曲に選んだ。そして2019/20年シーズンには、首席指揮者兼音楽監督のセミヨン・ビシュコフが、「わが祖国」を初めてチェコ・フィルと共に演奏した。

また2024年のチェコ音楽年を記念して、2023/24年シーズンには、ドヴォルザークの最後の3つの交響曲とピアノ、チェロ、ヴァイオリン協奏曲を、韓国、日本、スペイン、オーストリア、ドイツ、ベルギー各地で演奏する。

チェコ・フィルの歴史を通じて、自国の作曲家たちの擁護と、音楽が持つ人生を変えるほどの力を信じるのが、その中心を貫いている。1920年代という早期より、ヴァーツラフ・ターリヒ(1919-41年の首席指揮者)は、労働者、若者、赤十字社、チェコスロヴァキア・ソコル(運動協会)、スラヴ女性連盟などのボランティア組織のためにコンサートを行う先駆者となり、1923年にはウィーン・フィルとベルリン・フィルの楽団員を含むロシア、オーストリア、ドイツの音楽家たちのための3つの慈善公演を行った。

その哲学は現在も大切に受け継がれている。総合的な教育戦略は、400を超える学校のあらゆる年代の生徒たちをルドルフィナムに招き入れ、イダ・ケラロヴァが推進した、チェコ共和国とスロヴァキアのロマのコミュニティのための音楽と歌のプログラムは、社会から排除された家族たちに、自分たちの声をみつける機会を提供した。さらに2020年からは、イギリスの王立音楽院や中国、南京の江蘇大劇院と交換教育シリーズを実施している。

マルティヌーとヤナーチェクの音楽の古くからの擁護者であったように、自国の著名作曲家も新人も同じように理解し広めていく活動は、チェコ・フィルの活力の源泉となっている。ビシュコフとのコラボレーションにより、9人のチェコの作曲家たちへオーケストラ作品が委嘱されると同時に、国外の5人の作曲家にも作品を委嘱している。さらに同楽団は、年1回の若い作曲家のためのコンクールを開催しているが、これは2014年に、今は亡きイルジー・ビエロフラーヴェク(首席指揮者:2012-17年)が立ち上げたものである。

Czech Philharmonic



# Czech Philharmonic

Music Director / Chief Conductor  
**Semyon Bychkov**

## 1st Violin

Jan MRÁČEK / *Concertmaster*  
Jan FIŠER / *Concertmaster*  
Magdaléna MAŠLAŇOVÁ  
Otakar BARTOŠ  
Luboš DUDEK  
Marie DVORSKÁ  
Bohumil KOTMEL  
Jiří KUBITA  
Lenka MACHOVÁ  
Viktor MAZÁČEK  
Pavel NECHVÍLE  
Helena SKOPOVÁ  
Zdeněk STARÝ  
Jindřich VÁCHA  
Milan VAVŘÍNEK  
Zdeněk ZELBA

## 2nd Violin

Markéta VOKÁČOVÁ  
Václav PRUDIL  
Zuzana HÁJKOVÁ  
Petr HAVLÍN  
Pavel HERAJN  
Jitka KOKŠOVÁ  
Milena KOLÁŘOVÁ  
Marcel KOZÁNEK  
Veronika KOZLOVSKÁ  
Jan LUDVÍK  
Vítězslav OCHMAN  
Jiří ŠEVČÍK  
Helena ŠULCOVÁ  
Filip KUBITA

## Viola

Pavel CIPRYS  
Dominik TRÁVNÍČEK  
Jaroslav PONDĚLÍČEK  
Pavel HOŘEJŠÍ  
Martina ENGLMAIEROVÁ  
Jaroslav KROFT  
René VÁCHA  
Ondřej MARTINOVSKÝ  
Jiří POSLEDNÍ

Patrick SHANNON  
Lukáš VALÁŠEK  
Michaela KOSTKOVÁ

## Cello

Václav PETR / *Concertmaster*  
Josef DVOŘÁK  
Marek NOVÁK  
Jakub DVOŘÁK  
Peter MIŠEJKA  
Jan HOLEŇA  
František HOST  
Josef ŠPAČEK  
Jan KELLER  
Eduard ŠÍSTEK

## Double Bass

Adam HONŽÍREK  
Petr RIES  
Gonzalo JIMÉNEZ BARRANCO  
Ondřej BALCAR  
Jaromír ČERNÍK  
Martin HILSKÝ  
Jakub AMCHA  
Theodor DITRICH

## Flute

Andrea RYSOVÁ  
Naoki SATO  
Petr VEVERKA  
Jan MACHAT

## Oboe

Jana BROŽKOVÁ  
Barbora TRNČÍKOVÁ  
Vladislav BOROVIKA  
Jiří ZELBA

## Clarinet

Jan MACH  
Lukáš DITTRICH  
Jan BRABEC  
Petr SINKULE

# Czech Philharmonic

## Bassoon

Ondřej ROSKOVEC  
Jaroslav KUBITA  
Tomáš FRANTIŠ

## French Horn

Jan VOBOŘIL  
Ondřej VRABEC  
Mikuláš KOSKA  
Hana SAPÁKOVÁ  
Kateřina JAVŮRKOVÁ  
Dominika GÚBEROVÁ

## Trumpet

Stanislav MASARYK  
Walter HOFBAUER  
Marek VAJO

## Trombone

Lukáš BESUCH  
Jan PERNÝ  
Lukáš MOŤKA  
Karel KUČERA

## Tuba

Václav STEKLÝ

## Timpani

Michael KROUTIL

## Percussions

Petr HOLUB  
Pavel POLÍVKA  
Miroslav KEJMAR

## Harp

Jana BOUŠKOVÁ



A GLOBAL PARTNER  
OF THE CZECH  
PHILHARMONIC

PPF Group as the global partner of the Czech Philharmonic supports the international artistic endeavours of the orchestra.

## Profile

### 藤田 真央 (ピアノ)

Mao Fujita, Piano

2017年、弱冠18歳で第27回クララ・ハスキル国際ピアノ・コンクール優勝。併せて「青年批評家賞」「聴衆賞」「現代曲賞」の特別賞を受賞。

2019年チャイコフスキー国際コンクールで第2位を受賞し、審査員や聴衆から熱狂的に支持され世界の注目を集めた。

自然体で奏でられる、繊細かつヴィルトゥオーゾを持ち合わせた唯一無二の美しい音色が高く評価され、次々と世界の舞台に招かれる。ルツェルン音楽祭、ヴェルビエ音楽祭、エディンバラ国際音楽祭、ラ・ロック＝ダンテロン国際ピアノ音楽祭、ツィナングリ音楽祭など主要な音楽祭へ定期的に出演。2023年1月、カーネギー・ホールにてホール主催のソロ・リサイタルデビューを果たした。同年5月、音楽監督リカルド・シャイー率いるミラノ・スカラ座フィルハーモニー管弦楽団とのヨーロッパツアーを成功させる。同年7月、ウィグモア・ホールにて5日間に亘るモーツァルト：ピアノ・ソナタ全曲ツィクルスを開催。さらに同月、ヴァイオリニスト、マルク・ブシュコフとのベートーヴェンのピアノとヴァイオリンのためのソナタ全曲ツィクルスを、ヴェルビエ音楽祭、テルアビブ、ツィナングリにてそれぞれ完遂させた。2023/24年シーズンには、バイエルン放送交響楽団、ウィーン交響楽団、ロサンゼルス・フィルハーモニック、チェコ・フィルハーモニー管弦楽団、フランクフルト放送交響楽団にデビュー。最近および今後共演のオーケストラは、ロイヤル・コンサートヘボウ管弦楽団、クリーヴランド管弦楽団、ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団、ベルリン・コンツェルトハウス管弦楽団、ベルリン・ドイツ交響楽団、ミュンヘン・フィルハーモニー管弦楽団、フランス放送フィルハーモニー管弦楽団、ロイヤル・フィルハーモニー管弦楽団、イスラエル・フィルハーモニー管弦楽団、RAI国立交響楽団、ハンガリー国立フィルハーモニー管弦楽団、東京都交響楽団、読売日本交響楽団。さらにはクリストフ・エッセンバッハ、リカルド・シャイー、アンドリス・ネルソンス、マレク・ヤノフスキ、ラハフ・シャニ、ヴァシリー・ペトレンコといった指揮者たちからの信頼も厚い。

2021年11月、ソニークラシカル・インターナショナルと専属レコーディングのマルチアルバム契約を締結し、2022年10月にはスタジオ録音による待望の「モーツァルト：ピアノ・ソナタ全曲集」をリリースした。このアルバムは、ドイツのクラシック音楽界で最も権威のある賞のひとつ、オーパス・クラシック賞2023にてYoung Artist of the Yearに選出された。同賞の受賞は近年の目覚ましい活躍と、将来を嘱望されるピアニストとしての世界各地で高まる評価を裏付けた。



© Dovile Sermokas

Mao Fujita, Piano



## ギル・シャハム (ヴァイオリン)

Gil Shaham, Violin



© Chris Lee

現代を代表するヴァイオリニストの一人。完璧なテクニック、比類なき優しさと寛大な心を併せもち、ヴァイオリンの巨匠としての地位を不動のものとしている。常に名高いオーケストラや指揮者からソリストとして招かれ、リサイタル活動以外にも世界有数のコンサートホールや音楽祭で活躍している。

近年のハイライトには、J.S.バッハ「無伴奏ヴァイオリンのためのソナタとパルティータ」の収録とその演奏会、そして長年共演を重ねてきたピアニスト江口玲との北米、欧州、アジアでのリサイタル・ツアーなどがあげられる。

ベルリン・フィル、イスラエル・フィル、ボストン響、シカゴ響、ニューヨーク・フィル、パリ管など名だたるオーケストラと定期的に共演し、モントリオール、シュトゥットガルト、シンガポールでは長年アーティスト・イン・レジデンスを務めてきた。また『1930年代のヴァイオリン協奏曲』と題したプロジェクトの一環では、バーバー、バルトーク、ベルク、コルンゴルト、プロコフィエフなどの作曲家の作品を追求してきた。

彼は、数多くの協奏曲とソロの録音をリリースし、数度のグラミー賞、アカデミー・シャルル・クロ・ディスク大賞(グランプリ)、ディアパゾンドール、「グラモフォン」のエディターズ・チョイスをはじめ、名高い賞にたびたび輝いている。多くは2004年に立ち上げた自主レーベルCanary Classicsからリリースされており、最新作は2021年にリリースされた『ベートーヴェン&ブラームス: ヴァイオリン協奏曲』である。

1971年、イリノイ州のシャンペーン・アーバナ生まれ。その後、両親と共にイスラエルに移住。7歳でルービン音楽アカデミーのS.バーンスタインのもとでヴァイオリンを始め、アメリカ・イスラエル文化財団の年間奨学生となった。1981年、エルサレム響とイスラエル・フィルにデビュー。1982年にジュリアード音楽院の奨学生となり、D.ディレイとH.カンに師事した。さらにコロンビア大学でも学んでいる。1990年にはエイヴリー・フィッシャー・キャリア・グラントを贈られ、2008年に名誉あるエイヴリー・フィッシャー賞を受賞。「ミュージカル・アメリカ」は2012年にシャハムを年間最優秀器楽奏者に出した。

使用楽器は、1699年製のストラディヴァリウス「ポリニャック伯爵夫人」と1719年製クレモナのアントニオ・ストラディヴァリウス。



Gil Shaham, Violin

## パブロ・フェランデス (チェロ)

Pablo Ferrández, Cello



© IGOR STUDIO

「ポップス界のアイドルのように人を引き付ける力、素晴らしいテクニック、そして爽快な気分させる音楽性」  
—ロサンゼルス・タイムズ紙

「スペインがパブロ・フェランデスという新たな天才チェリストを輩出」 —フィガロ紙

第15回チャイコフスキー国際コンクールの入賞者で、ソニークラシカルと専属契約を結ぶアーティストであるフェランデスは、「新たな天才チェリスト」(フィガロ紙)と称されている。人の心をつかむ演奏者で、「フェランデスはソリストとしての技術、気質、精神、そして権威のすべてを合わせ持ち、表現力と魅力に富んでいる」(エル・パイス紙)と賞賛され、驚異的なチェリストとして、同世代の中でもっとも需要の高い器楽奏者の一人となっている。

近年共演した主なオーケストラには、ロサンゼルス・フィル、チェコ・フィル、ミラノ・スカラ座フィル、オスロ・フィル、バイエルン放送響、ベルリン・コンツェルトハウス管、トーンキュストラ管、ウィーン放送響、イスラエル・フィル、ロッテルダム・フィルなどがある。前シーズンには、エドワード・ガードナー指揮/ロンドン・フィルとアンネ＝ゾフィ・ムターとの共演でツアーを行った。彼はまた、ヴェルビエ、ザルツブルク、ドレスデン、シオン、ドヴォルザーク・プラハ、グラント・パーク、エルサレムなど、国際的に著名な音楽祭にも頻りに招かれている。

2023/24年シーズンには、ニューヨークのデイヴィッド・ゲフィン・ホールでのデビューが、マドリッド交響楽団(リアル劇場管)との共演で予定されているほか、ボストン響、クリーヴランド管、サンフランシスコ響、ピッツバーグ響、シアトル響、トーンハレ管と共演し、ロッテルダム・フィル、ロンドン・フィル、HR響、フランス国立管、ガリシア響と再共演する予定。さらに、ロサンゼルス・フィルを再訪し、ドゥダメル指揮のもと、ムターとブラームスの二重協奏曲を演奏する。また、ビシュコフとチェコ・フィルとともに、日本(今回)とヨーロッパでツアーを行い、ドヴォルザークのチェロ協奏曲を演奏する予定。

1991年、スペインのマドリッドで音楽家の両親の家に生まれ、13歳で権威あるソフィア王妃高等音楽院に入学し、ナタリア・シャコフスカヤのもとで研鑽を積む。その後、ドイツのクロンベルク・アカデミーでフランス・ヘルメルソンに師事し、さらにアンネ＝ゾフィ・ムター財団の奨学生となった。

使用楽器は、1689年製ストラディヴァリウス「Archinto」。寛大なストレトン協会のメンバーにより、生涯貸与されている。



Pablo Ferrández, Cello

アントニン・ドヴォルザーク(1841-1904)は伝統的な様式のうちに母国ボヘミア(チェコ)の民謡や舞曲の特徴を取り込みながら、ボヘミアの民族的な芸術音楽を追求した。今回のチェコ・フィルの日本公演では、彼の3つの大作協奏曲と後期の3大交響曲、さらに円熟期に生み出された序曲3部作『自然と人生と愛』が取り上げられるが、いずれの曲も民族主義の精神を打ち出す一方で、それぞれが際立って個性的な特質を示している。かつてドヴォルザーク自らが指揮したチェコ・フィルは、そうした彼の音楽の民族的特色とともにその作風の広がりと多様性を深い共感をもって表現してくれることだろう。この大作作曲家の芸術の精髓を存分に堪能したい。

### ドヴォルザーク:序曲3部作『自然と人生と愛』

#### 序曲「自然の中で」Op.91

#### 序曲「謝肉祭」Op.92

#### 序曲「オセロ」Op.93

ドヴォルザークはすでに円熟期に入っていた1891年から翌年にかけて、3曲の演奏会用序曲からなる“序曲3部作『自然と人生と愛』”を作曲した。

そのうち“自然”に相当する第1曲が序曲「自然の中で」Op.91で、ボヘミアの自然賛歌ともいえるソナタ形式による曲である。第1主題となる牧歌的な旋律が重要な役割を果たし(この第1主題は“自然の主題”として3部作共通の主題となる)、明朗な発展を繰り返していく。夕暮れのような余韻を残すコーダも印象深い。

“人生”を表す第2曲の序曲「謝肉祭」Op.92はとりわけ有名な曲。人生を謝肉祭に見立て、浮かれた熱狂的な気分を基調としつつ、人生の波乱と浮き沈みを表すかのように叙情的な部分や闘争的な部分を挟んで展開する。提示部と展開部の間の平和的な一節には3部作共通の“自然の主題”が出現する。

第3曲は“愛”をテーマとする序曲「オセロ」Op.93だが、シェイクスピアの劇による題からも窺えるように嫉妬を描いた曲で、全体に劇的な緊迫感に満ち、3曲共通の“自然の主題”もここでは暗い性格に変容されている。序奏では祈りの気分が“嫉妬の主題”の断片によって脅かされ、主部の第1主題は“嫉妬の主題”と“自然の主題”の動機が組み合わせられている。

### ピアノ協奏曲ト短調 Op.33

この作品は1876年にボヘミアのピアニスト、カレル・スラフコフスキーのために書かれた。ブラームス風のシンフォニックな重量感のうちにボヘミアの民族的色合いを溶け込ませた作品だが、重厚な管弦楽パートに比べ、ピアノ・パートは難度が高いわりには際立たないことから、演奏機会があまりない。そのためヴィレム・クルツの手でピアノ・パートが改訂された版も作られ、一時はそれを

用いた演奏が多かったが、近年は原典版を重んじる傾向が強くなっている。今回のソリスト藤田真央も原典版を使用することだが、彼のことなのでこれまでの作品のイメージを一新するような演奏を聴かせてくれるだろう。

**第1楽章**(アレグロ・アジタート)は協奏風ソナタ形式、重厚な響きのうちに豊かなロマン的な情感を打ち出した長大な楽章である。**第2楽章**(アンダンテ・ソステヌート)は憧憬の気分に満ちた叙情的な緩徐楽章。**第3楽章**(アレグロ・コン・フォーコ)は民俗舞曲風の主題を中心に叙情的なエピソードを挟んでいくフィナーレである。

### ヴァイオリン協奏曲 イ短調 Op.53

この協奏曲はドイツの名ヴァイオリン奏者ヨーゼフ・ヨアヒムの勧めで着手され、1879年に一応の完成を見た。しかしヨアヒムは作品に満足せず、ドヴォルザークは彼の提案に沿って改訂を施したものの、結局初演はチェコの奏者フランチシェク・オンドジークが行っている。ボヘミアの民族表現を激しく打ち出しつつ(その点がヨアヒムの趣味に合わなかったのかもしれない)、それをヴァイオリンの名技と見事に融合させたいかにもドヴォルザークらしい協奏曲である。

**第1楽章**(アレグロ・マ・ノン・トロポ)は冒頭で管弦楽に続いてヴァイオリン独奏が示す主題からして民族的で、自由なソナタ形式のうちに奔放ともいえるラプソディックな展開が繰り返されていく。休みなしに続く**第2楽章**(アダージョ・マ・ノン・トロポ)は情感に満ちた緩徐楽章。**第3楽章**(アレグロ・ジョコーソ、マ・ノン・トロポ)は民俗舞曲フリアントを主題としたロンドで、中間主題はドゥムカ(スラヴ民謡の一種)に基づくなど、全体に民族色に満ちた発展が織り成される。

### チェロ協奏曲 口短調 Op.104

ドヴォルザークは晩年の一時期、ニューヨークで暮らした(交響曲第9番「新世界より」の項参照)。この時期の彼の作品には母国に対する望郷の思いを感じさせるものが多いが、特にアメリカ時代最後の1894年晩秋から翌年2月にかけて書かれたチェロ協奏曲は、そうした感情が強く現れ出ている。彼は着手前の1894年夏の休暇に一時帰国しており、そのことがアメリカに戻った後の彼の母国愛を一層強めることとなったようだ。シンフォニックともいえる壮大な響きとスケール感のうちにチェロと管弦楽の表現力をフルに発揮させた劇的な作品で、古今のチェロ協奏曲の最高峰ともいえる傑作である。

**第1楽章**(アレグロ)は協奏的ソナタ形式で、悲愴感を湛えた第1主題と5音階によるノスタルジックな第2主題を軸に劇的に運ばれる。**第2楽章**(アダージョ・マ・ノン・トロポ)は憧憬と孤独な思いを綴ったような叙情的な楽章。**第3楽章**(アレグロ・モデラート)は民俗的な主題を中心に技巧的なチェロと雄弁な管弦楽が起伏に満ちた発展を繰り返すフィナーレである。ドヴォルザークのかつて恋人ヨゼフィーナ(結局その妹が妻となった)が好んだ歌曲が第2楽章中間部と第3

楽章コードに引用(後者は完成後に彼女の死を知って加筆されたもの)されているのが意味深長である。

### 【交響曲第7番 ニ短調 Op.70

ドヴォルザークは第6番までの中期の交響曲をとおりて民謡や民俗舞曲の語法を導入して民族色を打ち出したが、1884年末から1885年3月にかけて作曲されたこの第7番ではさらに新しい境地を拓く。尊敬するブラームスの第3交響曲に大きな刺激を受けて書かれたといわれる作品で、実際渋いロマン性のうちに豊かな感情を湛えている点や、堅固な論理的構成と綿密な展開法という点で、ブラームスの影響がみられよう。一方で、国際的な名声を高めていたこの時期のドヴォルザークは、当時盛り上がりを見せていた民族主義運動に共鳴して愛国心を一層高め、民族的闘争の中で音楽家は何をなすべきかを真剣に考えていた。そうした中で書かれたこの第7番は、激しい民族的な主張を、それまでの交響曲のようにストレートに打ち出すのではなく、より内面化された形で表現し、伝統的な交響曲様式と民族表現を内的に融合している。暗い情感や内なる情熱性、ボヘミア的な味わい、民族的な抵抗精神を感じさせる悲劇的なドラマ性がロマン派の交響曲のスタイルの中で見事に息づいた作品である。

**第1楽章**(アレグロ・マエストロ)は暗くうごめくような第1主題に始まるソナタ形式楽章。緻密な展開のうちに民族的な情熱を織り込んでいる。**第2楽章**(ポコ・アダージョ)は叙情的な穏やかさのうちに痛切な思いを綴ったような緩徐楽章。**第3楽章**(スケルツォ、ヴィヴァーチェ)はボヘミアの民俗舞曲フリアントの特徴を持つスケルツォ。**第4楽章**(アレグロ)は暗い闘争的な性格のソナタ形式のフィナーレだが、最後は長調の終結に至る。

### 【交響曲第8番 ト長調 Op.88

1889年に作曲されたこの第8番は、ドヴォルザーク自身「個性的で新しい書法による、自分のこれまでの交響曲とは異なった作品」と述べているように、自由な発想による独創的なスタイルの交響曲で、伝統的な交響曲の論理的な作法から離れ、湧き上がる楽想とラプソディックな自由な発展を生かす中で民族的な精神を表現している。構想はプラハの南西に位置する豊かな自然に囲まれた小村ヴィソカーでなされているが、まさにそうしたボヘミアの自然や生活感が感じられるような、郷土的な色合いを強烈に打ち出した作品だ。

**第1楽章**(アレグロ・コン・ブリオ)はソナタ形式をとるが主題や楽想が多彩で、第1主題からして冒頭短調で示される楽想と、続いてフルートが吹く牧歌的な長調の楽想という対照的な2つの楽想からなり、さらにヴィオラとチェロのコラール風の楽句、短調で出る第2主題、さらに木管が伸びやかに歌う長調の旋律などが次々出現するというように、長調と短調の揺れ動きと曲想の変化が目まぐるしい。その一方で展開部ではそうした要素が念入りに展開されるという交響曲作家ら

しい論理的な面も窺わせている。**第2楽章**(アダージョ)は自然の中での孤独感を感じさせる楽章だが、中間部では霧が晴れたような明るい盛り上がりを見せる。**第3楽章**(アレグレット・グラツィオーソ)はメランコリックな主題を持つ民俗舞曲風の楽章。中間部の明朗な主題は自作のオペラ「頑固者たち」からの引用。トランペットのファンファーレで始まる**第4楽章**(アレグロ・マ・ノン・トロポ)は自由な変奏形式による明快なフィナーレである。

### 【交響曲第9番 ホ短調 Op.95「新世界より」

この第9番は交響曲ジャンルにおけるドヴォルザーク最後の作で、民族主義的な交響曲を追求してきた彼の方向の総決算であると同時に、それまでの彼の交響曲にはなかった新たな特質も示されている。それはこの作品が、ニューヨークの音楽院の院長としてアメリカに滞在していた時期に書かれたことと関わっている。彼はアメリカに1892年秋から95年春まで滞在して院長としての仕事に励んだ。しかし異国の生活に馴染めず、母国への思いを募らせていく。そうした心情はこのアメリカ時代に書かれた作品の多くに現れており、アメリカ民俗音楽の要素や新大陸の文化の影響を窺わせながらも、それすら故郷ボヘミアの音楽の特徴に重ね合わされている。1893年に書かれたこの交響曲でも、幾つかの主題は黒人霊歌などアメリカ音楽との関連を示しつつ本質的にはボヘミア風の性格付けがなされており、またアメリカ詩人ロングフェローの叙事詩「ハイアワサ」に感銘を受けて書かれたという第2楽章も、そこで描かれているのは郷愁の感情といえよう。作曲家自身による「新世界より」という題も、その“～より”という語に異郷から故国を思う心情が読み取れる。

**第1楽章**(アダージョ～アレグロ・モルト)は劇的な表情を持つ序奏に、闘争的なソナタ形式の主部が続く。主部の第1主題はすでに序奏で現れていたもので、続く全ての楽章でも回想される。**第2楽章**(ラルゴ)は郷愁感溢れる叙情的な緩徐楽章で、イングリッシュ・ホルンの吹く主要主題は有名。**第3楽章**(スケルツォ、モルト・ヴィヴァーチェ)は民俗舞曲風のスケルツォ。**第4楽章**(アレグロ・コン・フォーコ)はソナタ形式の劇的なフィナーレで、荒々しい第1主題、ノスタルジックな第2主題など、激しい感情と憧憬の間を揺れ動きつつ、これまでの3つの楽章の主題も回想しながら起伏に富んだ展開を示す。





# ARTIST SUPPORT

【アーティストサポート】を通して、  
アーティストたちの活動をご支援いただき、ありがとうございます。  
時や国を超え「生きる力」を与えてくれる文化・芸術に、  
引き続きのご支援をお願い申し上げます。

ご支援をいただいた個人ならびに企業・団体の皆さま

## <2023年度年間サポート>

F.A Y.A 今井良成 S.U 植原由起子 S.U M.E A.O K.O S.O 河村はるみ K.K  
木村美明 M.K 小室秀夫 新貝康司 N.S M.S A.D 土屋涼子 ツールラブ真智子  
ツールラブ真凛 N.N 中島和 中野和枝 中村尚義 中村美穂 T.H M.H 藤野盾臣  
細沼康子 M.H 松尾芳樹 松田 香 真野美千代 三橋祐太 J.M H.M S.Y  
TDK株式会社 MEDIHEAL & SEKIDO コンツェルト・ハウス・ジャパン by 株式会社キタマ  
株式会社ソーシャルキャピタルマネジメント 株式会社ロジックアンドエモーション  
ライフプラン株式会社 Heart of the Earth 株式会社  
ナレッジワーカーズインスティテュート株式会社 株式会社RINABO きづきアセット株式会社  
株式会社青林堂 日本パデレフスキ協会 淡路

(匿名希望 22名)

## <館野泉バースデープロジェクト>

Y.A 阿部将任・登美子 一柳吉子 A.I 大谷恵美子 S.O 小畑裕子 木全恵美子 M.K  
黒川智恵美 黒住彰子 斉藤久子 坂井 和 佐々木暁子 菅原佳世子 鈴木早苗 R.T  
田邊英利子 中村康江 K.H 羽生賢次 福島晶子 堀田高秀 松田純子 三上美智恵 光永 育  
K.M 山家七恵 S.Y 吉岡玲子 吉田和充・淳子 館野泉ファンクラブ東京 日本セヴラック協会  
有限会社ムジカーザ NPO法人 Mプロジェクト

(匿名希望 14名)

## <ニュークラシックプロジェクト>

浅岡尚子 岩井睦雄 上原啓子 小田島容子 K.K 久保千聖 雲然祥子 小池美喜  
篠崎啓史 I.S T.S ツールラブ真智子 ツールラブ真凛 T.N 長谷部宏行 秦勝重  
T.H 林 路郎 細沼康子 牧野佳那 松下泰之(マティビ) S.Y

(匿名希望 14名)

2023年9月30日現在 敬称略/匿名希望の方は記載していません

ご支援についての詳しい内容は、どうぞ下記へお問い合わせください。

株式会社ジャパン・アーツ アーティストサポート係 Tel.03-3499-7720

(平日11:00~17:00 年末年始を除く)

アーティストサポートの  
詳細はこちらを  
ご覧ください。

